
マジでか？！銀魂だあ！！

潤里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジでか?! 銀魂だあ!!

【Nコード】

N3223Y

【作者名】

潤里

【あらすじ】

銀魂大好きな高2の瀬田 真弓。

親の血を引き継いで弓道をしていて、大

会では負けナシ!でも、それは自分の本望じゃなくて

親にやらされていただけ。自分の名前も大嫌い!!

そして、ある日。大好きな銀魂の中に入っちゃって・・・?!

大人気アニメ銀魂のおもしろ恋愛小説!!

第一話 入っちゃたyo!! (前書き)

新連載です!!

長い目で見てやってください (笑)

次回からギャグも入ります (笑)

第一話 入っちゃたyo!!

あ、ども。瀬田^{せた}真弓^{まゆみ}です。

銀魂大好き高2です。

突然ですが・・・

私は、自分の名前が嫌いなんです。

真弓・・・普通『真由美』でしょ?!

意味は、『真っ直ぐにはしる弓のような心でいなさい』

とか、また意味の分からない事で・・・

親が弓道の選手で、こんな名前に・・・

私も習わされて(親に)やっぱ、血を受け継いでたみたいで・・・

大会では、負けナシ。こんな力・・・ないほうが良かったんですけ

どね

ま、その辺はどーでもいいんです。注目してほしい所は・・・

銀魂が大好きってところです!! めっちゃ好きで、周りの人も見て

るんですよ♪

今もマンガみてます。

「あははははは! おかしい! お腹痛いよ!」

その時。なにかに、吸い込まれた・・・

「きゃああああああ!」

ドッカーン!!

「痛い・・・痛ーーーーい・・・」

めっちゃ痛かった・・・

「痛いなコノヤロー!!」

「え・・・え?！」

聞き覚えのある声が下から聞こえた。
見てみると・・・

「嘘・・・」

銀ちゃん?! — — — —

第二話　　嘘でしょ・・・

「痛いなコノヤロー！」

「嘘・・・」

銀ちゃん？！

「どうしたんですか？！銀さん！！・・・うえええええ！！誰ですか？！」

ダメガネ？！

「どうしたアルか？」

神楽ちゃん？！

よよよ・・・

「万事屋ああああ？！」

「お前、なに者アル？どうして、私たちの事知ってるアル？」

「え、あ？！へ？？ええええええ！！！」

「大丈夫ですか？！」

「オイ！降りろや！！！」

「「「あ。」」」

乗ったままだった・・・

「すみません。重かったんですね。」

「いや、重くはなかったけど・・・」

「それより、こちらにどうぞ。」

「すみません。」

「銀さん。着替えて下さい。」

「ああ、わりい、わりい」

「着替えてー」

「悪いな」

「かっこいいなあ・・・」

「オイ。お前、なに者アル？」

「信じてもらえないだろうし・・・」

「大丈夫。あらかたのことは信じてやらあ。」

「はあ・・・」

ピンポーン

「ツチ・・・新聞ならいらねーって言ってんだろ!!」

強烈キックで戸を壊す銀ちゃ・・・銀さん・・・

「銀時。隠れさせてくれ。ぐはっ!!」

「なんだ、ズラか。」

「ズラじゃない、桂だ。」

「しゃあねえな・・・人いるから。静かにしろよ」

「分かっている・・・」

「おお女か?!」

「上に乗って、起こされた。」

「して、なにがあった?」

「お前、何勝手に話し進めてるアルかあ!!」

「俺の話無視か?!」

「ぐはっ、リーダー銀時やめてくれ!!」

「もう、3人ともやめてくださいよ。人がいるんですから。」

「くすくす・・・あはは・・・」

「なんだよ。」

「いや、仲がいいんだなって」

「いや、私たちは仲良くないアル。」

「そう言ってる方が、仲がいいんですよ。」

「むう・・・」

「(この二人を丸め込むなんて・・・なんてひとだ・・・)」

「それより、どうしたんだ。つか、名前。」

「ああ、えっと・・・本っていうか漫画読んでたら、

なんかに、吸い込まれた・・・みたいな・・・

名前は、瀬田 真弓です。」

「なんの本だ?」

言っているのかな? いや、でもこの人たちの漫画だし・・・

「買ったばかりで、あんまり覚えてないんです。すいません」

「まあ、いいや・・・つか、すごくね。?」

「はあ・・・」

「かあああああつらああああ!!」

ガラッ!!

戸が開いて真選組が入って来た。

「まてええ!! 桂!!」

「さらばだ、真弓!」

「あははは・・・」

「また、お前らか。いいかげんしょっぴくぞ。」

「俺らは関係ねえって言ってんだろ。多串くん。」

「誰が多串くんだ!! おい、ソウゴ行くぞ。」

「旦那ァ、そいつ（真弓）だれですかィ?」

「え? ああ・・・わけあって今ここにいる瀬田 真弓だ」
「ども。」

「万事屋、お前らが女を・・・」

「うるせえ、ゴリラ。」

土方さんだああ・・・顔赤くないかな・・・

「おい・・・真弓・・・とやら。顔赤いぞ。」

「真弓でいいですよ。」

「俺は、真選組副長 土方 十四朗だ。なんとでも読んでくれ」

「じゃ土方さんで」

「おう。」

「二人の世界はいんじゃねええ!」

「真弓は私のアル!! マヨ方になんか渡さないネ!!」

「あの・・・名前・・・は?」

「「「「あ。
「「「「

＜続＞

第三話 自己紹介!! (前書き)

何日もお休みしてすいません!!
潤里、完全復活です!!

第三話 自己紹介!!

「あの・・・名前は・・・？」

「」「」「あ。」「」「」

本当はみんな知ってるよ〜

「じゃ、俺から行きませア。

沖田 そうご。真撰組1番隊隊長。

夢は、副長の座を奪うこと。」

「ほーほーほーう」

「も〜、土方さん、沖田さんやめて下さいよ。

あ、僕は志村 新八です。えっと・・・」

「主にツツコミ、万事屋の雑用、地味・メガネ係だ。」

「地味・メガネ係ってなんだ、コラアア!!」

「俺は、万事屋のオーナー。坂田 銀時。趣味は糖分摂取。
好きな食い物は宇治銀時井。」

「私は神楽アル。歌舞伎町の女王アルよ！
分からない事は何でも聞くヨロシ！
この子は、定春アル!!」

「かわいいね。」

「俺は、さっき行っただと思うが、土方 十四郎。
好きなものは、土方スペシャル。真選組副長だ。」

「えー。俺は、真選組局長 近藤 勲だ。
お妙さんの旦那の予定だ。」

「誰がお前の妻になるかあああああ！！！腐れゴリラアアアア！！」

「姉上！！」 「アネゴ！！」

「お妙さああああん！！」

「お前は黙ってろおおおお！！」

「なんで、いるんだよ。」

「いえ、玉子焼き作りすぎちゃったんで、おすそ分けに」

「（か、かわいそうな卵だああ！！）」

「あら、この子誰かしら？？」

「ああ、わけあって今家にいる、瀬田 真弓だ。」

「私は 志村 妙よ。新ちゃんの姉なの。
よろしくね。真弓ちゃん」

「よろしくおねがいします。」

「銀時いい！！家賃出せ！！」

「だから、テレビ直してやったからいいだろがああ!!」

「二か月分の家賃だぞ!! しかも、またぶっ壊れたわい!!」

・・・って誰だい?この子。」

「銀時さま、女の子を家に呼んじゃいけませよ。」

「ツイに、オカシクナッタカ」

「わけあって、今万事屋にいる瀬田真弓だよ」

「ほー。私は、下でスナックお登勢を経営してる、お登勢だ。

本名は 寺田 綾乃って言うんだ。」

「私は、下でお登勢さまの手伝いをしている。からくり家政婦タマです」

「ワタシハ、下でお登勢さんのテツダイヲしてる、キャサリンです。」

「よろしくお願いします。」

「そうだわ!真弓ちゃん!」

「はい?」

「私の、お古になるけど。着物をあげるわ!!変わった格好をするもの・・・」

やっぱ!!どーしよ・・・そうだ!

「私のいたところでは、この格好が普通なんですよ!!」

「へー、そうなのか。どーりで変わってるはずだ。」

「ま、家に来て!!」

「おい!! 待てよ!」

「トシ、そうご、俺たちも行くぞ。（お妙さんの家に行ける!!）」

「仕事はどうすんだ。仕事は。」

「いいじゃないですかイ。今日ぐらい。」

「お前はいつもサボってるだろ。」

― 志村家（道場） ―

「男はここで待ってなさい。」

「わかってるよ。」

「真弓ちゃん、行きましょう」

「すみません」 「早く行くアル!!」

「あ、待って神楽ちゃん!」

「20分後」

「おせーな。」

「遅いですね」

「女はこういうの時間がかかるんだよ」

「近藤さん、女と付き合ったことないのによく知ってますね。」

「そうご、激しく傷ついた。」

「ほんとに、仕事どーすんだ・・・」

「かわいいじゃない！大丈夫よ！」

「かわいいアルよ！！自信持つアル！！」

「いや、でも・・・」

「「「「・・・」」」」

「よっこいしょ」

「銀さん??」

「ガラッ！！」

「開けるなあああ！！」

「もう、開けちゃった。」

「ほら、真弓ちゃん。私に隠れてないで。」

「いやだ!! 絶対出ない!!」

「ふふふ。恥ずかしがり屋さんね。」

「こっち来るアル!!」グイッ

「うわっ!!!! 痛っ!! 転ぶううう!!」

「おっと。大丈夫か？」

「土方さん。ありがとうございます・・・
・・・あんまり、見ないでください・・・」

私、絶対、顔赤い・・・

「まあ、いいんじゃないの？」

「銀さん・・・!! うれしいです!!」

「俺も、いいと思うけど・・・いい加減立ってくれ。」

「あ。」

ずっと、支えてもらっぱなしだった・・・やっぱ、大きいんだな・
・

「どこに泊まるつもり？」

「決めてないですね・・・てか、迷子てきな感じなんで・・・」

「じゃ、真選組だな。」

「なんでだよ!!」

「迷子〓警察の仕事なんですよ。旦那。」

「嫌アル!! あんな、男どもの中にいれるわけにはいかないネ!!」

「じゃあ、お前も来れば?」

「なんでそうなるアルかああ!!」

「まてまて、神楽。」ヒソヒソ「食費が浮くぞ」

「・・・しょーがないアルな。私も行くヨロシ。」

「神楽ちゃん。ありがとう」

「俺たちも行くぜ。」

「しょうがない。帰るか、そうご、トシ。」

「分かりやした」「おう。」

<続>

第三話 自己紹介!! (後書き)

次回、ついに真弓ちゃんが弓を放ちます!!

第四話 真弓の力（前書き）

遅くなつてすみません！！

第四話 真弓の力

「ここが屯所だ。隊士たちに紹介したいから客間で待っていてくれ。そうご案内頼むぞ。」

「分かりやした。」

「俺たちやどうしてたらいいんだ。」

「その辺にでも居ろ。」

「なんだと!!」「ふざけないアル!!」

「ふざけてない。」 「キーーーー!!」

「お前~~~~!!」

「さっ、行きましょう。」 「はい。」

―客間―

「ここですア。ところで、真弓はなにか武芸をやってるのかイ?」

「えっ?!」 「凶星かい」

「何で!!」 「手にタコがある」

「なにやってん(武芸)ですかイ?」

「・・・弓・・・弓道を・・・まあ・・・」

「ふーん・・・そうでさア、確か倉庫に弓矢ありますぜイ。行くでさア！」

「あ、沖田さん?!」

「弓矢を持ってきてー」

「打ってみるでさア」

「はあ・・・ふーーーー・・・行きます・・・」

「!!（目が真剣に・・・変わった?!）」

「キリキリキリ・・・」

「・・・」

「真弓——!! 道場に・・・は?!」

「キリキリキリ・・・」

「何やって・・・真弓?!」

「打ちます・・・」 パツ ギュン! ドン!

「ど真ん中・・・すげえ・・・」

「はっ!!土方さん、近藤さん?どうしたんですか?」

「どうしたもこうしたもねえよ!すげえな!!」

「まあまあですね・・・こんな力ない方がよかったのに・・・」

「?!真弓・・・?」

「だっはははは!!真弓あつ晴れだ!!」

「そうそう、隊士達が全員道場で稽古してるからそっちに来てくれ。」

「あ、はい。」

「(今真弓の顔が・・・)」

「ほう・・・面白い奴じゃねえか・・・」

「晋助様。バレルので今日は帰りましょう。」

「おう。(面白れえ)」

「晋助・・・高ぶってはいかんでござる。」

「分かってる。」

「始めまして。瀬田 真弓です。しばらく万屋さんたちと共に厄介になります。」

「」「」「おおおおお!!」「」「」

「美人じゃないスカああ!! 副長!!」

「うるせっ!!」

「」「あっはっはっはっは!!」「」「」

「瀬田 真弓・・・覚えておくぞ」

<続>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3223y/>

マジでか?! 銀魂だあ!!

2011年11月26日18時01分発行